

しらかば

2016 年春号 第32号

北海道中国帰国者支援・交流センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目かでの 2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412 URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp> E-mail: hokkaidocenter@dosyakyo.or.jp

で ま え に ほ ん ご きょうしつ
出前日本語教室

集まる場所ができてうれしい



お待ちかねの^ま出前^{で まえに}日本語教室^{にほんごきょうしつ}が、手稲^{ていね}前田公園^{まえだこうえん}
市^し営^{えい}住宅^{ちゅうたく}団地^{だんち}ではじめて開^{ひら}かれました。3月^{がつ}23日^{にち}
同団地^{どうだんち}集会所^{しゅうかいじょ}には、8名の帰国者^{めい きこくしゃ}のみなさんが
集^{あつ}まりました。団地内^{だんちない}でふだん^つから付^あき合いはあり
ますが、こうしてみんなで集^{あつ}まるのははじめてと、
笑顔^{えが お}いっぱい。集^{あつ}まる場所^{ばしょ}ができたよ^{よろこ}くでくれま
した。この地区^{ち く}は、センターまで通^{つうしよ}所^{しよ}するには乗換^{のりかえ}な
ど交通^{こうつう}の不便^{ふべん}な地区^{ち く}です。移動^{いどう}が難^{むずかしい}しい人もいます。
そこで「出前^{で まえ}」になりました。集 会所^{しゅうかいじょ}は歩^{ある}いて5分^{ぶん}
もかかりません。

どうどんち せ たい ちゅうごくき こくしやいつせい
 同団地には、6世帯の中 国帰国者一世のみなさん
 す ねん だいいちじ
 が住んでいます。いずれも1987年からの第一次
 き こく じ き さいだい きこく
 帰国ラッシュと呼ばれる時期に、40歳代で帰国し
 てきた「残留 孤児」です。平均年齢は71歳。いず
 ぐんりゅうこ じ へいきなんれい さい
 れも黒竜 江省、吉林省の農村出身者 で、学校
 こくりゅうこうしやう きつりんしやう のうそんしゅつしんしや がっこう
 へも行けず、幼少 時から苦労を重ねてきた人たちで
 い ようしやうじ くらう かさ ひと
 す。中国の農村文化を背景に持ち、帰国後は造園業、
 ちゅうごく のうそんぶん 文化 はいけい も きこくこ そざうえんぎやう
 けんせつぎやう こうじやう あせ はたらき くらう かさ
 建設業や工 場で汗にまみれて働き、苦労を重ね、
 じょうば にほんご み しごと
 現場で日本語を身につけました。そして仕事を

や 辞めて 10 年、日本語も使うことも少なくなり、
「忘れた」といいます。でも、日本語は勉強 したい
という気持ちを持ち続けています。

だ い い っ か い め に ほ ん ご か い ご よ ぼう
第一回目やさしい日本語と介護予防

はじめての出前教室、1時間目は健康運動です。もみじ台団地で行われている介護予防サロンのラダーウォーキングを試してみました。指導は竹田憲司先生です。「転倒防止」のためのラダーウォーキングに、みなさん熱心に取り組みました。「むしろ失敗することが認知症予防」と、上手にできた、失敗したと、お互いに声をかけ合い笑い声いっぱいの教室になりました。



2時間目は、やさしい日本語教室。絵カードを
見ながら発話の練習、みなさん簡単にできちゃいま
す。五十音の発音練習 など、思い出すようにスター
トしました。「すぐ忘れる」、でも一回一言ずつでも
覚えたいと語っていました。

第一回目が終了すると、みなさん充実感 いっぱい、晴れやかな表情 です。次は4月、みなさん時間を確認しあい、わいわいがやがや、楽しみだと笑顔で話っていました。

あさひかわすいぎょうざ かい
旭川水餃子の会

ボランティアさんに伝える水餃子づくり



きこくしゃ はいぐうしゃ
帰国者や配偶者

のみなさんは、
なが じんせい つう
 長い人生を通じて
か ち
 たくさんの価値あ
たくわ
 るものを蓄えてき
 ました。

今回のおしゃべ

り交流会 は、帰国者のみなさんの生活文化を伝えて
 もらおうと、中国 料理「水餃子交流会」として
 開きました。ボランティアさんの発案で開かれた会
 は、1月29日旭川市神楽公民館で中国 帰国者のS
 さん、Hさんを中心に進められました。

長年のおしゃべり交流で、樺太帰国者、中国
 帰国者とボランティアのみなさんはすっかり親しい
 間柄です。食材の買い出しは、ボランティアさん。
 調理が始まると、Sさんが大きな声で説明、
 一生懸命に指示を出します。それに応えてみんなテ
 キパキと動き、グループごとに各調理テーブルで
 作業していきます。

Hさんも大活躍、ボランティアさんも粉を^{こな}
 練^ねったり、野菜を細^{やさい}かく切^きったり、同時^{どうじ}におしゃべ^{はじ}
 りも最高潮^{さいこうちよう}。餃子^{ぎょうざ}の皮^{かわ}作りや、包^{つつ}む作業も初^{はじ}めてと
 いうボランティアさん。上^{じょうず}手にできない、とSさん
 のだめ出^だしにも、笑^{わら}いながら作業は進^{さき}みました。樺太^{からふと}
 帰国者^{きこくしや}のみなさんも、ボランティアさんにもぎやか
 に協^{きょうりよく}力^{りき}して、いっそう親^{した}しくなります。

お 終わってみると、水餃子すいぎょうざの他にも焼餃子やきぎょうざや涼菜リョウサイ
 (前菜ぜんさい) など、テーブルにたくさんの料理が
 並びました。ちょうど春しゅんせつ 節むかを迎える時期じき、中国 伝統ちゅうごくでんとう
 の正月しょうがつりょうり 料理あじを味わい、いっしょに楽たのしました。そ
 れでも、Sさんは「いつもの味あじが出せなかった」、次つぎ
 はもっと美味おいしい料理りょうりをごちそうしたいと真剣しんけん、ボ
 ランティアさんも「おもしろかった」とはじめての水餃子すいぎょうざ
 の味に異文化理解いぶんかりかいを深めた一日ふか いちにちになりました。



ちゅうごく き こく しゃ しん ねん こう りゅう かい
中国帰国者新年交流会

いっせいに せいさんせい いっち きょうりよく
一世二世三世そしてボランティアが一致協力

ちゅうごくきこくじや たの こうれい
中国 帰国者のみなさんが楽しみにしている恒例
しゅんせつこうりゅうかい ちゅうごく きこくしゃんねんこうりゅうかい
の春 節交流会 「中国 帰国者新年 交流会」が、
がつ にち さっぽろしひがしくみん せいだい
2月14日、札幌市東区民センターホールで盛大に
かいさい さんが にん あまり ちゅうごく
開催されました。参加したのは120人余りの 中国
きこくしや しえんしや
帰国者、支援者、ボランティアのみなさん。

1 年^{ねん}に 1 回^{かい}の 交 流^{こうりゅう}、 帰 国 者^{きこくしゃ}一 世^{いっせい}は こ こ に 来^く れ ば み
ん な と 会^あ え る、 そ れ が 楽^{たの} し み と い い ます。 会 場^{かいじょう} は、
中 国 式^{ちゅうごくしき} に 春^{しゅん} 節^{せつ} の 飾^{かざ} り 付^つ け、 雰 囲 気^{ふんいき} も
盛^も り 上^あ が り ます。 一 世^{いっせい} 長 野 太 郎^{ながの たらう} さ ん の 乾 杯^{かんぱい} で 会^{かい}
は じ め り、 各 テーブル^{かく} で は に ぎ や か な お し ゃ べ り が
ひろ げ ら れ ます。 一 世^{いっせい} は 「 皆^{みな} に 会^あ え て 楽^{たの} し い 」 「 中 国^{ちゅうごく} み
たい な 会^{かい}。 気 持 ち が 安^き ま る^{やす} 」 と 笑 顔^{えがほ} です。

春しゅん 節せつ といえば 餃子ぎょうざ。今ことし 年きこく は帰国者きこくしゃ 一いっ 世せい、そ
してボランティアさんきょうりょく が協力あたら して温かい餃子ぎょうざ を
食た べてもらおうと大奮闘だいふんとう しました。そして、餃子ぎょうざ の他ほか
にも手て 作つく りの料理りょうり、自慢じまん の家庭かてい の味あじ を持も ち寄よ っ
て、
テてーブルぶる にはたた くささ のご馳走ちそう が並なら べられ、参さん 加か
した帰国者きこくしゃ のみなさんおおよろこ は大だい 喜き び、「ご馳走ちそう がいい っっ ぱい、
春しゅん 節せつ らしい」と大だい 好こう 評ひょう でした。

こうれい ぶんげい
恒例 の 文芸
はっぴょう さんせい
発表 は、三世の
こうこうせい なかざわ えり
高校生 中澤 絵里
さん と 龍男 君の
あね おとうと しかい
姉、弟 の 司会



でなごやかに
すす ちゅうごくきこくしや れんごうかい みんぞくぶよう うた
進みます。中国 帰国者連合会の民族舞踊や歌、いつ
だいけんこうくらぶ でんえい ぶ じゅつひょうえん
ものもじ台健康俱樂部田英さんの武術表 演など
た さい く ひろ きこくしや なつ
多彩に繰り広げられ、帰国者のみなさんには懐かし
こころやす
く心安らぐひとときとなりました。

新年会は、ボランティアさんが大活躍。日頃、センターの日本語会話、食文化交流などに協力しているみなさんです。帰国者のみなさんに楽しんでもらおうと朝から集まり、料理から会場作り、後かたづけまで力を発揮しました。おかげさまで、交流会は大成功となりました。

わっかない きょうど し がくしゅうかい
稚内 郷土を知る学習会

ふるさと ^{かん}「故郷」とのつながりを感じて

3月26日(土) 稚内 市立図書館に樺太帰国者
 10名、支援者3名が集まり、「郷土を知る学習会」
 が開かれました。今回は「樺太と稚内 のつながり」
 という題で、稚内市教育 委員会の齋藤 譲 一先生
 がお話 をしました。

帰国者のみなさんが以前住んでいた樺太、そして今住んでいる稚内とは昔からつながりがあります。90年ほど前は、船が太泊（コルサコフ）と稚内の間をひんぱんに行き来していました。齋藤先生は古い地図や資料、写真などをスクリーンに映して、目に見えるかたちでわかりやすく説明しました。

昨年さくねんフェリーでサハリンに行ったという先生せんせいは、
街の様子をカメラに収めていて、日本時代と現在にほん じだい げんざい
の様子ようすをスクリーンで比べてみることができました。
神社が取り壊されて、ロシア正教の教会せいきょう きょうかいが
建っている場所ばしょもあれば、古い建物たてものがそのまま
残っている場所ばしょも。帰国者の皆さんは興味深げに
見入みいっていました。



お話^{はなし}の後^{あと}は、それぞれの体験^{たいけん}を語り合^{かた}う座談会^{ざだんかい}が
開^{ひら}かれました。先生^{せんせい}のお話^{はなし}の感想^{かんそう}や、自分^{じぶん}が
生^うまれ育^{そだ}った場所^{ばしょ}の話^{はなし}の後^{あと}、今年^{ことし}から廃止^{はいし}になっ
てしまった稚内^{わっかぬい}ーコルサコフ^{かん}間のフェリーの
話題^{わだい}に。そもそもサハリン^いへの行き来^きがしやすい
から稚内^{わっかぬい}に住む^すことにしたという人^{ひと}もいるほど
で、この問題^{もんだい}は一番^{いちばん}の心配^{しんぱい}の種^{たね}のようです。なん
とか続^{つづ}けていこうという動き^{うご}もありますが、今^{いま}の

ところは何も決ま^なって^きいません。昔^{むかし}だけではなく、
 今^{いま}もこれ^{こゝ}から^{かゝ}も故郷^{ふるさと}との「つな^{つな}がり^がり」が大切^{たいせつ}であ
 ることを実感^{じっかん}させ^かれた会^{かい}でした。

あさひかわ こうりゅうかい ねん ふ かえ
旭川 おしゃべり交流会 1年を振り返って

たが りかい いよくてき けいかく
お互いの理解のために、意欲的に計画

3月28日、旭川のおしゃべり交流会は、
 帰国者のみなさん、ボランティアさんといっしょ
 に1年の交流活動を振り返りながら、新年度の
 計画を話しあいました。スライドを見ながら、ひ
 とつとつの交流を思い出し、意義を確かめ合い、
 意欲的な話し合いになりました。

帰国者からは、^{きこくしや} 昨年の「^{さくねん} 稲刈り^{いなか} 体験^{たいけん}」で^{いなか} 開拓^{かいたく}の
苦勞^{くろう}を知^しったので、^{こんど} 今度はボランティアさん^{ボランティアさん}の
人生^{じんせい}を知^しりたいという意見^{いけん}。ボランティアさん^{ボランティアさん}か
らは昨年^{さくねん}は樺太^{からふと}帰国者^{きこくしや}について^{まな} 学^{まな}んだので、次回^{じかい}
は中国^{ちゅうごく} 帰国者^{きこくしや}問題^{もんだい}の研修会^{けんしゅうかい}を、との要望^{ようぼう}。また、
帰国者^{きこくしや}の中国^{ちゅうごく}、樺太^{からふと}での^{たいけん} 体験談^{たいけんだん}を^き 聞き、その頃^{ころ}の
日本^{にほん}の生活^{せいかつ}と重^{かさ}ねてみたらどうかという^{こゑ} 声^{こゑ}もあり
ました。

そして、春を迎える時期、カタクリの群生地、突
 峭山にお弁当を持ってピクニックへ行く計画も
 決まりました。新年度も活発な交流活動お互い
 の理解がますます深まり、地域での支え合いも
 広がります。

進学ニュース！～^{しょうらい}将来の^{ひやく}飛躍へ～

今年もまた帰国者二、三世が見事に大学に合格しました。Rさんは札幌大学、Yさんは北海道から遠く離れた沖縄の琉球大学に進学し、現在はひとり暮らしです。新生活をスタートさせたばかりの彼らに、大学の感想を聞いてみました。

「大学生活は高校生活よりも厳しいけれど、
楽しくやっている」(Rさん)。「興味のある授業ば
かりとっているので、つまらなかったことは一度
もない」(Yさん)。将来の飛躍へとつながる大学
生活を彼らが存分に楽しみ、よい成果を取めるこ
とができるよう、心からエールを送ります。

じ りつけんしゅうじぎょう
自立研修 事業

さいご しよくば たいけん おお せい か
最後の職場体験で大きな成果

平成25年度から始まった帰国者二世の就労支援を中心とする北海道センターの自立研修事業は、平成27年度で終了しました。この間に、センターでは就職に結びつく日本語集中講座の開設、職場体験実習のプログラムを進めてきました。主な対象は樺太帰国者二世でした。

就職しゅうしょく も、折おりからの不況ふきょうで言葉ことばを理由りゆうに不採用ふさいようとなるケースが多く困難くわんなんを極めています。そこで
事業所おお、帰国者こくこく双方そふほうの理解りかいをはかり、就職しゅうしょくに
結びつむすけようと職場体験実習しよくばいけんじっしゅうを計画けいかくしました。しか
しながら、職場体験実習しよくばいけんじっしゅうの受け入れうけいれぎょうしよぎょうしよが
ないという理由りゆうで実現じつげんが困難くわんなんで、わずけんか3件けんに
留とどまりました。

きこくしゃどうし ささ しょくば じりつ いっぱ
帰国者同士が支える職場、自立へ一歩

今回、中国 帰国者二世 斉藤貴生さんが経営する
 斉藤産業（鉄工業）から求人 情報 がありました。
 同社では、2年前に樺太帰国者二世 S さんを職
 場体験実習を通して採用、今では工場内のすべての
 業務ができる、なくてはならない人材になっていま
 す。斉藤社長 から求人 情報 があり、S さんのよう
 な人がいれば採用したいと言います。言葉の問題も、
 斉藤社長 自身が日本語ができるようになったのは
 帰国後5年だった、と語るように「やる気さえあれ
 ば大丈夫」とのこと。

こんかい かららときこくしゃ にせい
 今回は樺太帰国者二世KさんとTさんが、できる
 ため がつ しょくばたいけんじっしゅう
 かどうか試してみたいと3月に職場体験実習を
 おこな こうじょう しどう
 行いました。工場で指導にあたるのはSさん。Sさ
 んは2年間で日本語もできるようになり、通訳もし
 ねんかん にほんご つうやく
 ます。実習の結果、KさんもTさんも仕事に対する
 じっしゅう けっか しごと たい
 り かい じしん さいよう
 理解と、「できる」という自信をつけて採用になりました。
 きこくしゃ じじょう み ち し さいとうしゃちやう ふう
 帰国者事情を身を持って知る齊藤社長の深い
 理解のおかげです。がんばれば生活も充実すると
 げきれい ふたり じりつ む ちからづよ あゆ だ
 激励します。二人とも自立へ向けて力強く歩み出
 しました。自立研修事業の最後に大きな成果
 がありました。



だいかいご
もみじ台介護サロン

こま き くばり ふん い き
細やかな気配りやさしい雰囲気いっぱい

ちいさ きこくしゃ あんしん ささ
地域で帰国者のみなさんの安心を支えようと、
NPOリーズネット たいかいご ぎょうほう
NPOリーズネットによる「もみじ台介護予防サロン
あんど
& ティサロン」は、 かつ かけつ かい
昨年7月から1ヶ月に1回、
つづ たけだ けんしん せんせい ほつたい がいけん だいいめい
続いてきました。竹田憲司先生(北海学園大名誉
きょうじゆ だいいちりょう まいかい
教授)によるラダーウォーキングは大好評。毎回、
じかん たの うんどう さんかしゃ ん
1時間楽しみながら運動します。参加者も増えてい
ます。

介護サロンには帰国者だけでなく、団地の住民の皆さん、民生委員、介護の専門家も参加して、理解や支援、交流の輪が広がります。

運動が終わった後のティーサロンも、毎回シーズンスタッフのみなさんの細やかな心配りがあります。1月は中国映画の会、2月はひな祭りを前にテーブルには桃の花が飾られ、桜餅 やウグイス餅もひな祭りの歌が紹介されると、帰国者が二胡を演奏し、温かな雰囲気になった交流会 になりました。帰国者のみなさんも「みなさんやさしい」「雰囲気が良い」とすっかり打ち解けています。

さんか じゅうみん みな かい かさ かお なまえ
参加した住民 の皆さんも、回を重ねて「顔と名前
がわかるようになってきました」と、安心につなぐ
る交流 がどンドンすすんでいます

いち だいかつやく
カレンダー市で大活躍！

年^{とし}の初^{はじ}めに開^{ひら}かれるカレンダーリサイクル市^{いち}に
 帰^{きこくしや}国^{めい}者^{しや}8名^{めい}が、ボランティアとして協^{きやうり}力^{りよく}しました。
 カレンダー^{しわ}の仕^し分^わけ作^さ業^{ぎやう}を、3日^{かひん}間^{かん}それぞれ都^{つごう}合^{ごう}の
 い^じい時^{かんたい}間^{たい}帯^{てい}で手^て伝^{でん}い^ふました。他^たのボランティアさん
 とのコ^こミュニケー^{こた}ション^ばもば^{ほんとう}っち^りで、「本^{ほん}当^{とう}に
 助^{たす}か^{こた}った」と感^{かん}謝^{しゃ}の言^{こと}葉^はが^あり^まし^た。

5月・6月・7月の行事

5月18日	出前教室(手稲区)
5月29日	DVD 上映会
5月下旬	旭川・おしゃべり交流会
6月13日	日帰り研修旅行
6月15日	出前教室(手稲区)
7月13日	出前教室(手稲区)
7月	DVD 上映会

しらかば

2016 年夏号 第33号

北海道中国帰国者支援・交流センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目かでの2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412 URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp> E-mail: hokkaidocenter@dosityakyo.or.jp

ぼくじょうたいけんりょこう 牧場体験旅行

ソーセージづくりに奮闘

6月13日(月) 中国・樺太帰国者53名のみなさんと、千歳市にある箱根牧場に行きました。箱根牧場では、バター、チーズ、ソーセージづくりや、乗馬、動物とのふれあいなどが体験できます。残念ながら当日は天気に恵まれず、小雨と風の中での牧場体験となりました。

牧場に着くと、まずは体験工房で牛肉のソーセージづくりを体験しました。羊の腸の口の部分を採ったり、ひき肉をスタッファーと呼ばれる道具を使って腸に詰めていく作業は慣れるまではなかなか難しく、腸が破れてしまったり、空気がかり入ってしまったりと、皆大騒ぎしながら一生懸命に取り組んでいました。



ソーセージを作り終えて工房内で焼してもらっている間にお昼ごはんとなり、輪になって持ってきたお弁当をひろげる人もいれば、牧場のレストランで食事をした人もいました。レストランのメニューは、すべて牧場で生産された新鮮な食材を使ったもので、利用した帰国者の間では、



ステーキが特に好評でした。

悪天候のため、乗馬や牧場を巡るカンントリーバス体験は中止になりましたが、昼食後もみなさんは売店で買いものをしたり、厩舎やウサギ小屋を見学したりしてのんびりと過ごしていました。

一生懸命作ったソーセージは、帰りにお土産として配られました。樺太帰国者は、日本のハムやソーセージは甘みがあっておいしくないと言いますが、今回のソーセージはしっかり塩気が効いていたようです。とはいえ、味については賛否両論でした…。

箱根牧場のように、牧場としての仕事のほかに、作物を加工して売ったり、レストランを経営したりする取り組みのことを6次産業化といいます。樺太帰国者のAさんは、ロシアではほとんどの場合、酪農家は酪農だけをやっていて、箱根牧場のような多角経営は珍しいと言っていました。雨のせいで、存分には楽しめなかったかもしれませんが、ちょっぴり社会勉強になった牧場体験でした。



サハリン (樺太) および 旧 ソ連地域 残留 邦人 のための 共同墓所 (慰霊碑)

落成記念式典

NPO法人日本サハリン協会

樺太帰国者の 共同墓所が実現



樺太帰国者の 共同墓所が札幌市南 区に完成、
5月14日、落成式典が行われました。共同墓所
は、NPO 法人日本サハリン協会が昨年4月から計
画を進め多くの支援者の募金を集めて1年で実現
する運びとなりました。式典には、帰国者、支援者、
一時帰国事業で帰国していた帰国団のみなさん
あわせて120名が参列しました。来賓には、高橋
はるみ北海道知事、工藤広 稚内市長、サハリン
に 日本人会白樺会長、セルゲイ・エフ・ミハイルロシ
ア総領事、本センターからは齋藤所長が参列し
ました。

祖国への思い、安らかに眠る場所

落成記念式典で、同会齋藤会長は 魂を慰霊し
集まれる場所とあいさつ。来賓を代表して高橋知
事は 共同墓所が「同胞を偲び北海道とサハリンを
結ぶ心の架け橋」とあいさつしました。

この日、共同墓所には 稚内の故金本登さんと
故金川英男さんの遺骨が納められました。家族の



みなさんは、安らかに
に眠る場所ができ安
心したと語っていま
した。共同墓所には
故人の写真や記念品
などを納めるポスト
も設けられました。
宇藤百合子さん(84)
は、帰国を果たせず
サハリンで亡くなっ

た母親の写真をポストに収めて、お母さんの 魂
も故郷に帰れたと「これで安心した。気持ちが落ち
ついて」と語りました。

歴史を後世に伝える記念碑

式典で感謝の言葉を述べた植松キクエさん(92)
は「サハリンで苦労したみんなといっしょに入れ
るお墓ができたことは心からありがたい」と思い
を語りました。墓碑には、北海道とサハリンを自由
に行き来するカモメが彫られ、亡くなった人々の
魂のふるさとサハリンと祖国の往来を象 徴し
ています。共同墓所は樺太帰国者の歴史の事実を
後世に伝えていく記念碑ともなりました。

帰国者問題理解のための普及啓発事業

地域に根ざした取り組みを

これまで、全国で年に1回厚生労働省主催によ
る「中国残留 邦人等への理解を深めるシンポジ
ウム」が開催されてきましたが、今年から各セン
ターが中心になって、地域ごとに残留 邦人への
理解のための催しが開かれることになりました。

本センターでは、昨年まで実施してきた帰国者
文化祭を、地域の人に参加してもらい、帰国者
について理解してもらう機会となるよう計画 中
です。詳しい内容はまだ未定ですが、文芸発表、帰
国者による体験談の発表や、帰国者問題に関する
講演などのプログラムを予定しています。



わっかない れ ぶんとう れき し せいかつ し けんがくかい
稚内・礼文島の歴史と生活を知る見学会

あら きょうど はっけん
新たな郷土を発見

榊内市では去年の利尻島に続き、日本サハリン
 協会との共同事業として、礼文島の見学会が6
 月23日（木）榊太帰国者6名が参加して実施され
 ました。当日は本当によい天気に恵まれ、島の美



その後、礼文町社会福祉協議会会長で現役漁師の築田義秋さんより、礼文島でのウニやコンブ漁についての話を聞きました。

島内見学では、スコトン岬、澄海岬、高山植
物園、桃岩等をまわり、目の前に広がる息を呑むよ
うな景色にみんな驚嘆し、さかんにカメラのシャ
ッターを切っていました。

「こんな場所があるなんて、知らなかった」、「こ
ういう機会がなければ行けなかった」。
帰長く住んでいても地元のことはあまり知らない、
ということはいくつありますが、参加者にとって、今
回の見学会は視野を広げる一助となったようです。



じもと
地元ボランティアに^{さき}支えられて

5月、北国の春がめぐってきて花の季節になりました。帰国者のみなさんに季節を楽しみ、地域のことを知ってもらおうと、5月24日嵐山公園の「北邦野草園」での交流会が開催されました。今回もボランティアさんの企画です。

やま
山のエネルギーもらった

ボランティアさんいわ曰く、嵐あらしはアイヌ民族の神みんぞく しん
 聖せいな山やま。眼めの覚さめるような新緑しんりよくに包つつまれて、エン
 レイソウなど山やまの草花くさばなの咲さく「北ほっほう邦や野草園や そうえん」を学芸がくげい
 員いんの案内みで見て回まわり、理り解かいを深ふかめることができま
 した。「山やまのエネルギーをもらった」、「サハリンで
 も山やまによく行いった」と帰国者きこくしやのみなさん。近ちかくに
 こんな場所ばしょがあったことを知しり、これからひとりは「一人
 でも来こられる」と喜よろこんでいました。

お昼は、展望台から旭川市街を望みながらお弁当をひろげ、さらにおしゃべり。帰国者もボランティアさんも「虫には刺されたけど楽しい時間」を過ごした、との感想を述べていました。ふだん気持ちも閉じこもりがちな帰国者のみなさんには郷土を知り、生活圏の広がりを感じ、心も広がる一日になりました。



ボランティア体験 — 力を合わせればできる

6月17日サッポロフラワーカーペット実行委員会が主催する「フラワーカーペット」製作に、日本語中級Bクラス13名が参加しました。担当したのは、バラやカーネーションの花びらを茎からとる作業です。クラスの平均年齢は70.5歳。慣れた手つきで黙々と作業にあたっていました。作業終了後は、主催側から感謝され、少し疲れは見たものの、達成感でいい表情でした。「また来年も参加したい」「力を合わせれば色々な事が出来るとわかった」等の感想が聞かれました。

て いねまえ だ だん ち で まえきょうしつ
手稲前田団地出前教室

たの 楽し く 学 ぶ 健康 教室 も



3月から始まった手稲区前田団地の出前教室。
帰国者のみなさんは楽しみに集まってきます。と
にかく集まる場所ができてうれしい、と1ヶ月に
1回ではなくもっと増やしてほしいと言います。

6月15日は、日本語の学習のほかに健康についても学びました。市社会福祉協議会にお願いし、これから夏に向かって「脱水に注意しよう」というテーマで勉強しました。みなさん、教材を楽しく使いながら、先生とのやりとりも活発、身体の仕組みを知り水分を取ることの大切さを学びました。これからは地域に交流をひろげることも課題です。帰国者のみなさんの声を聞きながら、みなさんに喜ばれる楽しい教室をめざします。



8月・9月・10月の予定

8月11日～8月24日	日本語教室夏休み
9月18日	DVD 上映会
9月24日	日本語教室前期終了
10月11日	日本語教室後期開始
10月	一泊研修旅行

帰国者の社会参加～編集後記に代えて～

樺太帰国者のための共同墓所が完成するなど、
時の流れを感じさせる出来事が多い中、若い世代
の成長と活躍が期待されます。

7月10日に行われた選挙では、選挙権年齢が18歳以上に引き上げられました。若い帰国者23世は、社会参加についてどのように捉えているのでしょうか。聞いてみたところ、選挙には行かなかったという人がほとんどでしたが、真面目な意見も聞くことができました。

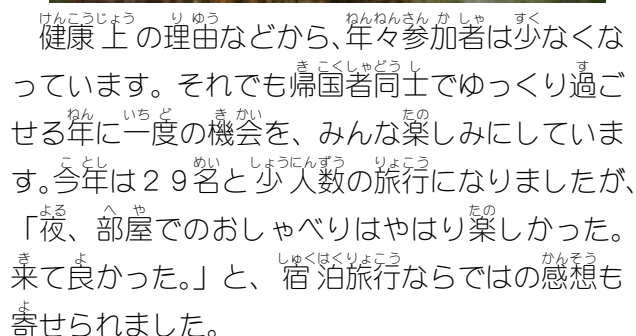
Ｙさんは、住民票を移した関係で今回は投票
 できなかったのですが、「選挙に行かないことは、
 自分の将来に無関心だということ」と言います。
 今年沖縄の大学に進学し、基地問題を目の当
 りにしたことが、考えを深めるきっかけになっ
 たようです。

「北海道では見られない人の様子、聞けない情報を知って毎回驚いています。基地で働いている知り合いがいるので、アメリカ側の様々な意見も聞いています。両方の側から問題について考える機会があり、毎回思うのは、ほとんどの人が現実を知らず、うそを信じて、それが広まってしまっていること、わたしたちはマスメディアに頼り切って生きているということです。当たり前ですけど、何を信じるか自分で判断しなくてはならないという結論に達しました」。

投票（とうひょう）に関しても「候補者（こうほしや）に関する（かんする）記事（きじ）を読んで、すぐに決める（きめる）ことはできない。各人（かくじん）の行動（こうどう）などを見て、時間（じかん）をかけて選ぶ（えら）べき」といいます。

とはいえ、あふれる情報じょうほうを吟味ぎんみし、選別せんべつしていくことは簡単かんたんではありません。今回選挙きんかいせんきよに参加したNさんも、候補者こうほしやを選ぶのは大変たいへんだったと言います。それでも「国民こくみんの声を反映こえする方法はんしの一つだから、選挙せんきよはだいじと考え、周りの友達まわりのともだちや先生せんせいやバイト先の人とたくさん話はなしをして決めた」そうです。

わかもの
若者たちのしんし
しせい
な姿勢に、きぼう
かん
希望が感じられます。



旭川・おしゃべり交流会

す じんせいかた り かい
過ごした人生語り、理解しあう



今回のテーマは「あの時代、人生語り合い」です。7月28日、帰国者の皆さんとボランティアの皆さんが、中国、ロシア、日本で同じ時代にどのような生活をしていたか、お互いの人生経験を語り合いました。

中国帰国者Hさんは、1945年ハル濱の鉄道の駅の難民収容所で母が病死、食べ物もなく拾って食べたこと、そして養父母にもらわれたことなど、悲惨な体験を語りました。

樺太帰国者Kさんは、家族で残留し父は漁師をしたこと、ロシアの学校へ入ったけれどロシア語がわからなかったこと、韓国人の友達がいっぱいたったことなど、残留後の生活を話しました。戦後生まれのLさんは、小さい頃は貧しく、いいことは何もなく、ロシアの子ども達と体操チームに入り、選手として活躍したことなど、サハリンの生活を語りました。

ボランティアのSさんは、戦争の時代をY県で過ごしたけれど静かであったことなどを語り、他の人も戦後の子ども時代の思い出を話しました。それぞれ国での体験から、中国やサハリンでの帰国者の苦難の人生が浮き彫りになりました。

ボランティアの皆さんからは、帰国者の人生をもっと知りたい、聞きたいと理解を深める一歩になりました。



わがかない にほん しょくぶん か まな かい
稚内・日本の食文化を学ぶ会

りょう り つう ぶん か たいけん
料理を通じて文化体験



「日本の食文化を学ぶ会」が、10月20日稚内市の総合勤労者会館調理室で行われました。樺太

帰国者の参加者は8名。講師の先生は、去年の料理講習会でもお料理を教えてくださいました荒岡真貴子先生。「まるで炊き込みきのこごはん」「鮭の南蛮漬け」「真だくさん豚汁」の3品を調理しました。初めに先生から、料理の手順や切り方などを説明してもらい、二つのグループに分かれて実際に調理を行いました。

家で毎日料理はしていても、いざこのような料理教室となると、皆さん、ちょっと戸惑ってしまうようです。日本料理は、出汁に醤油や酒、みりん、砂糖、塩などを加えて味付けしますが、それぞれの調味料をきちんと計量して正しい順番で入れていくのは不慣れな様子でした。イチヨウ切りや短冊切りといった言葉もめずらしかったようです。

ほかにも「鮭の南蛮漬け」に添える野菜は生で食べるため、細く千切りにしなくてはなりませんが、豚汁に入れる野菜は大きめに切ります。Hさんはうっかり豚汁用のジャガイモも薄く切ってしまい、大笑いしていました。

最後に出来あがった料理を皆で試食しました。お料理はどれも好評で、皆さん「おいしい」「家でもつくってみる」と口々に言っていました。「こういうことはしょっちゅうやったら駄目。太ってしまうから。」なんて冗談を言う人もいました。戸惑いつつも、日本料理の細かなところに日本の食文化を実体験した一日でした。

地域で温かな理解を

「中国・樺太帰国者を知る集い」

11月26日地域の人々に残留邦人への理解を深めてもらう啓発事業として「中国・樺太帰国者を知る集い」が、かでのホールで開催されます。

これまで毎年行われていた文化祭のように、太極拳や中国の伝統舞踊、日本語の学習発表もあります。第一部は「知って下さい残留邦人(帰国者)のこと」と題して、帰国者理解のための特別なプログラムを準備しています。

そのひとつが樺太帰国者による体験再現劇。帰国者の実際の体験をもとに、文化や習慣の違い、言葉の壁から生まれた戸惑いや誤解が描かれます。中国もロシアもそれぞれの文化や習慣があるけれど、自分でも気づかないまま誤解していることがあるかもしれない…。劇を見た方にそんなことを少しでも考えてもらえたら、と樺太帰国者1世クラスを中心にした有志が、今一生懸命練習中です。日本語で演じるため、人によっては自分のセリフをロシア文字で台本に書きこんだりと、奮闘しています。



※写真は去年の文化祭の様子です。

また札幌市立大通高校とNPO「CaSA」・ロシア学校の子どもたちが歌と踊りを披露してくれます。参加希望の方は、FAX・郵送・メールで当センターまでお申し込みください。入場無料です。お問い合わせも当センターまでお願いいたします。

NPO「CaSA」について

「子どもたちに選択の幅を」

「CaSA」は、「Child-assist Sapporo Association」の略で、外国人児童・保護者のサポートを主な目的として、2008年に設立された非営利団体です。北海道大学学術研究員のスヴェトラナ・パイチャゼ先生と1人の小学校教師によって設立されました。日本語教育とその他の科目の学習支援が、ボランティア講師によって行われています。

現在は、毎週土曜日に北海道大学構内で「土曜教室・ロシア学校」と並行して授業が行われており、ここに多くの樺太帰国者の子どもたちが通っています。

帰国者の子どもたちは、日本・ロシア・韓国など複数の文化と言語を背景に持っていますが、「何人として、どの言語で生きていくか」ということは、子どもたち一人ひとりが自分で決めること。ただ子どもたちの選択の幅をできるだけ広げてあげることは、とても大事」と、CaSA代表のパイチャゼ先生は言います。実際、帰国者の子どもたちのほとんどが「ロシア学校」でロシア語を、「CaSA」では日本語を学んでいるそうです。

パイチャゼ先生も、自身のお子さんを日本で育てています。「CaSA」設立の一番大きな動機は、自分が母親になったことだと言います。子どもたちには、「いま学んでいること、経験していることを大切にして、これからの人生に生かしてほしい」と語ってくれました。

もみじ台団地・介護予防サロン

この街で知り合えてうれしい



毎月1回のもみじ台団地での介護予防サロン、7月から2年目に入りました。毎回、25名ほどの帰国者と町内の皆さんが参加しています。

指導する竹田憲司先生(北海学園大名名誉教授)は、筋肉や関節の動きをやさしく説明、みなさん、身体の知識も深まり興味も湧きます。転倒防止や認知症予防に効果のあるラダー運動は、先生から「いいよ、いいよ」「すばらしい!」と声かけられながら、にぎやかに進みます。

1時間の運動が終わると1時間の交流会。ジャスミン茶とお菓子がふるまわれ、おしゃべりもはずみです。町内のAさんは「ここで顔見知りになったおかげで、道やスーパーであったときにも声をかけて立ち話もできる。帰国者の皆さんもこの街で知り合えてうれしい、と言ってくれるのがうれしい」と笑顔で語ってくれました。

前田公園団地の出前日本語教室が終了

10月から介護予防と交流の会に

4月に始まった前田公園団地の出前日本語教室は、半年の講座を9月で終了しました。10月からはNP0シーズネットに委託して、もみじ台団地で取り組まれてきた「介護予防サロン」が始まることになりました。



出前教室は、センターに通所できない帰国者の皆さんのために、やさしく日本語を学びながら楽しく交流しようと進められ、帰国者の皆さんには学ぶことが楽しい、集まる場所があってうれしいと喜ばれてきました。

引き続き、老後の生活をさまざまな経験を広げて豊かに楽しく過ごしてもらおうと、健康維持と交流の会に発展させることになりました。

担当するNP0シーズネットの青木さんは「新たな広がりができてうれしい」と今後の取り組みに張り切っています。

料理交流会

おはぎと漬けもので交流



日本人にとって身近で、比較的かんたんにしてくれる料理を体験して

もらおうと、7月25日かでの調理室で料理交流会が開かれました。メニューは、「おはぎ」と「キャベツときゅうりの漬物」。市販の浅漬けの素をつかった漬物は意外に好評で、空のパッケージを持ち帰った人もいました。おはぎは餡が甘すぎるとい人もいましたが、終わってみれば、皆きれいに平らげていて、楽しく食文化交流できました。

11月・12月・1月の行事

11月20日	DVD上映会
11月22日	ボランティア研修会(旭川)
11月26日	中国・樺太帰国者を知る集い
12月23日	樺太帰国者交流会
12月23日~1月10日	日本語教室冬休み

しらかば

2017年 冬号 第35号

北海道中国帰国者支援・交流センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目かでる 2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412 URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp> E-mail: hokkaidocenter@dosyakyo.or.jp

し　みん　さん　か　り　かい　ふか
市民が参加、理解を深める

ちゅうごく からふと き こくしゃ し つど
中国・樺太帰国者を知る集い



「中国・樺太帰国者を知る集い」が 11月26日、かでるホールにて開催されました。この催しは、地域における残留邦人への理解を促す目的で開催され、参加者は 191名、うち 103名が市民の参加でした。

所長の開会挨拶（しよちょうのかいかいあいさつ）について、当センターで（とうせんたーで）作成した「残留邦人の歴史と現状」（ざくせいした「ざんりゅうばんにんのれきしとげんじょう」と題したスライド）が上映され、残留を余儀なくされた経緯（けいゐ）や帰国後の問題などが紹介されました。帰国者の中には自身（みづかみ）の境遇（きょうぐう）に重ね合わせて涙（なみだ）する人も。また一般（いっぱん）の参加者（さんかしゃ）にも、このスライドは「わかりやすかった」と好評（こうひやう）でした。



の生活の中で戸惑ったり、誤解されたりした体
 験がもたっています。帰国者が直面する文
 化や言葉の壁を、一般の人にも感じてもらえる

内容でした。一生懸命練習した成果が出て、演じた帰国者の皆さんは「私たちの思いが届いたと思う」と満足そうでした。

また中国の伝統舞踊や太極拳のほか、札幌
市立大通高校とNPO「CaSA」の生徒たちによ
る歌やダンスが披露されました。大通高校は
道内で唯一、海外から来た生徒のための特別
入学枠がある高校です。帰国者、日本で暮ら
す外国人、日本人の子供たちが一緒にロシア
民謡「コロボーチカ」に合わせて踊る姿、自由
に様々な文化を楽しんでいる姿は、
本当に素晴らしいものでした。



き こくしゃ あたた こえ
帰国者へ 温かな声も

さん か し ゃ べんきょう
参加者からは「とてもよかった」「勉強になっ
た」という声のほか、「子どもの頃サハリンにいた」
「場合によっては、私が日本語を学ぶ身になっ
ていたかも」という声もあり、引き揚者である人も
今回の催しに関心を持って来てくれました。

「大変な思いをした方々が、少しでも今の生活を楽しんでいるのが嬉しかった」「生まれ育った国を離れ、違う国の文化を受け入れての生活は大変なこと」と帰国者に寄り添う温かい感想もあり、より深く帰国者について知ってもらい一助となった集いでした。

みんなでつくるロシアのお祭り **樺太^{き へつ}帰国^{こくしや}者^{こうりゆう}交流^{こうりゆう}パーティー**

12月23日 東区民センターに、旭川・帯広など道内の樺太帰国者^がと支援者計88名が集まり、「樺太帰国者交流パーティー」が開催されました。開催時期を年末に変えてから、今年で4回自。クリスマスツリー点灯や、帰国者によるミニコンサートもすっかり恒例となりました。



はじめはロシアのサンタクロース「ジエド・マロース」が登場し、魔法を使ってもみの木に灯りをつけようとしますがうまくいきません。皆で力を合わせて、ようやく灯りが付いたところで、所長の挨拶、ミニコンサート、来年の酉年にちなんだゲーム、ダンスとプログラムは続き、参加者はリラックスした様子で「ロシアのお祭り」を楽しみました。テーブルの上には、帰国者有志手作りの 800個のペリメニ(ロシアの水餃子)の他、持ち寄りの手作り料理がいっぱいに並べられました。

ミニコンサートでは、ハーモニカ演奏や歌の他、帰国者2世のTさん夫婦が大人の雰囲気たっぷりのダンスを披露。また 4年前の交流パーティーで大好評を博した「白鳥の湖」が、今回は白鳥と黒鳥の踊りで披露され、再び喝采を浴びていました。



こうりゅうひろ こころ
交流 広がり、心 つながる

今回は中国帰国者も数名参加しました。中国帰国者の交流会とは雰囲気が違うと「樺太帰国者の人たちが優しく迎えてくれて、ロシア語がわからなくても心から楽しめた。ロシアの餃子や真の入口のパン(ピロシキ)もおいしかった」と喜んでいました。また1人は樺太帰国者とともにミニコンサートにも出演し、また新たに交流の輪が広がりました。

最後は、ロシアの人が大好きなフリーダンスでパーティーは盛況のうちに締めくくられ、共催のNPO法人日本サバリン協会の角田洋子理事が、飛行機が欠航のため参加できなかった齋藤弘美会長の代わりに閉会挨拶をしました。皆さん、お互いに来る新年を祝う挨拶をし、笑顔で「よかった」「楽しかった」と言い、心つながる会になりました。

わっかない ころりゅう
稚内でも交流パーティー

ロシアの雰^{ふん}囲^い気^きいっぱい

12月25日、稚内
日友好会館で樺
太帰国者によるク
リスマスパーティーが
開かれました。

今年で 2 回目となるパーティーは、昨年と同じく稚
内市在住の帰国者の皆さんが知恵を出し合い、協力
しあって、暖かくて楽しいロシアの雰囲気いっぱい集
いとなりました。そして、これまでお世話になった方々
にたいして、感謝の気持ちが表わされました。

参加したのは帰国者の皆さんや、横田前椎内市長をはじめとする市役所OBの皆さんなど 26名。パーティーは、当センターと日本サハリン協会が共同で開催し、帰国者の皆さんが自発的に取り組んだ活動を支援しました。



パーティーは、日本サハリン協会齊藤弘美会長の
あいさつではじまりました。テーブルには、帰国者の皆
さんの手作りのロシア料理がならび、「これぞロシアの
味」と招かれた皆さんも大喜び。歌やダンス、ロシアの
ゲームには皆さんが参加して、笑顔とかけ声、大爆笑
が絶えない中、心の底から帰国者が伝えるロシアの文
化を楽しみました。



ち い き ひろ き こくしゃ かつどう
地域に広がる帰国者の活動

さまざまな苦勞（くろう）を乗り越えて稚内（ちない）の地で生活（せいかつ）している帰国者（きこくしゃ）の皆さん（みな）が、生き生きと地域（ちいき）に広がる活動（かどく）を生み出（だ）しました。参加（さんか）した人（ひと）からは、「誰（だれ）から言（い）われたのでもなく、自発（じはつ）的に取（と）り組（く）んだことは素晴（すば）らしい」という声（こゑ）が聞（き）かれ、地域（ちいき）の交（こう）流（りゅう）を広（ひろ）げようという、帰国者（きこくしゃ）の皆さん（みな）の思（おも）い（おち）が伝（つた）わる会（かい）になりました。



旭川・ボランティア研修会

「なぜ残されたのか…」
帰国者が語る体験、歴史



昨年の樺太帰国
 者問題の研修に続
 き、今年は中国帰国
 者問題を学び会を
 開きました。11月22
 日「なぜ残されたの
 か、そして何が起きたのか」と題して、中国帰国者林
 文雄さんの体験談を聞きました。樺太帰国者のHさん
 は「たくさん聞きたいことがある」と参加、同じ時代に
 生き樺太と中国に残されたことに深い関心を示しまし
 た。

こ じ たいけん いのち じんせい
孤児体験、命をつないだ人生

満州開拓移民から逃避行、引揚にいたる歴史を学び、そのなかで起きた林さんの体験を聞きました。7歳の時、母に連れられ避難した難民収容所で、母が見つけてきた食べ物をも布を被って食べたといまでもはっきり覚えていること。母が亡くなり、一人となってソ連兵の食べ残しを拾い食いしたり、ハルビン駅構内のベンチ下で寝泊まりしていた時に、足で蹴られて追い出されたこと。そして連れていかれた床屋で働かされ、そうして命をつないだことなど、苦難の人生を語りました。

ボランティアのみなさんは、^{はやし}林さんの^{たいげんだん}体験談に^き聞き入り、「もっと聞いてみたい」と理解を深めていました。

Hさんは「戦争^{せんそう}を起^おこしてはならない。戦争^{せんそう}になっ
たら犠^ぎ牲^{せい}になるのは子^こ供^{ども}たち、自^じ分^{ぶん}の体^{たい}験^{けん}に重^{かさ}なる」と
語^{かた}り、林^{はやし}さん「二^に度^どと戦^{せん}争^{そう}は起^おこしてほしくない」と
強^{つよ}くそ^{この}心^{おも}の思^{おも}い^{かた}を語^{かた}りま^{した}。

編集後記

昨年11月の「中国・樺太帰国者を知る集い」は、当センター初の
試みでしたが、おかげさまで無事に開催することができました。
後日新聞に載った記事を見て、喜ぶ帰国者の姿がありました。

きょうむ にほん ご えんかくがくしゅう しん
教務から・日本語遠隔学習に新コース

まな かいごしかく
学んでみませんか、介護資格

日本語「遠隔学習課程」に、新
しく「介護職員初任者研修受講
準備コース」が加わりました。

介護職員初任者とは、従来の
ホームヘルパー2級に相当し、自
身では日常生活を送るのが困難
な高齢者や障害者へ入浴、食事、排泄などの身体介
護、そして掃除、洗濯、買い物、調理といった日常生活
の援助をすることを前提とした資格です。

2013年度から介護の資格制度が新しくなり、ホームヘルパー2級研修が、「介護職員初任者研修」に変更されました。

この資格を持つ人は、在宅だけではなく養護老人ホームや、デイサービスセンターなどの施設で働くことも想定されています。また最近では、家庭内での介護にもいかせる知識として講座を受講し、資格を取る人も増えているそうです。

介護職員初任者研修は誰でも受講できますが、最後に筆記試験を受ける必要があります。

今回新しく加わったコースは、研修の受講に必要な基本的な知識を身につけ、講座で出題されるレポート問題やグループワークへの対応のしかたを学ぶことを目的としています。

いまのところテキストは中国語版のみですが、介護職しやくに関心のある人ひとを対象たいしょうとしています。興味のある方は、教務までお問い合わせください。



2月・3月の行事

2月5日	中国帰国者新年交流会
2月10日	健康運動教室
2月26日	DVD上映会
3月19日～4月10日	日本語教室春休み

しらかば

2017 年春号 第36 号

北海道中国帰国者支援・交流センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目かでの2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412 URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp> E-mail: hokkaidocenter@dosyakyo.or.jp

中国帰国者新年交流会

春節を祝い、思いを集めて交流深める

中国のお正月「春節」を祝う恒例の中国帰国者新年交流会が、2月5日、東区民センターで開かれました。毎年の春節交流会を楽しみにしているという、100名を超える多くの帰国者の皆さんが集い、新年を祝い、交流を深めました。

中国帰国者の皆さんの多くは、帰国してすでに20年、30年という月日を過ごしてきました。皆さんの人生の思いを集めて集い、今を喜び、仲間同士の話も広がります。家族で参加した二世は、仕事を語り、子どもの成長を語ります。懐かしい中国風の会、その中国の雰囲気にも気持ちも安らぎ、会場は笑顔にあふれました。



ボランティアの皆さんに支えられて

今年の交流会は、帰国者一世二世、そしてボランティアの皆さんが、力を合わせて会場を飾りつけ、テーブルを並べ、手作り料理も心を込めて準備しました。春節に欠かせない餃子は、中華調理師でもある二世松本君男さんの手によるもの、そしておいしい焼餅にも、皆さん大喜びでした。

そして楽しみの文芸発表、今年は一世代伊藤美代子さんが企画、進行を担当し、舞台では中国民族舞踊や中国の歌が繰り広げられ、色とりどりの衣装に会場も華やぎました。最後は、いつもの秧歌踊りで会場はひとつになり、大いに交流を広げ深めた一日になりました。帰国者の皆さんは、「今年はとくによかった」と語っていました。

今年もまたボランティアの皆さんに支えられ、みんなの力を合わせて開かれた新年交流会。喜びを分かち合う会になりました。

社会につながるきっかけ

帰国者のボランティア体験

中国・樺太帰国者有志が、ボランティア活動を体験しました。ボランティアとは、いわば縁の下の力持ちです。ひとつのイベントが、それなりの時間をかけ、たくさんの人たちが、小さいかもしれないけれどそれぞれの役割を果たすことで完成していく、その過程を体験する貴重な機会となりました。

また、帰国者にとってボランティア体験は、社会と関わるきっかけにもなるし、日本語力を試すチャンスでもあります。

札幌アジア冬季競技大会



冬季アジア大会は、「冬のオリンピックのアジア版」とも言われる総合国際スポーツ大会で、今年は2月19日から2月26日まで札幌で開催されました。

この大会に中国・樺太帰国者8名がボランティアとして参加し、会場入場時の手荷物検査や、空港での選手の出迎えなどを担当したほか、通訳ボランティアとして活躍した人もいました。また休憩時間には、他のボランティアさんとの交流も楽しむことができました。

特に今回は樺太帰国者2名が、ロシア語の通訳ボランティアに挑戦しましたが、人手が足りずひっぱりだかったそうです。怪我人がでて医療通訳をしなければならなかったり、監督同士の電話での会話の通訳を頼まれるなど、思いがけない場面がいくつかありました。そんな中でも、なんとか通訳をこなせてしまったことが自分でも驚きだった、と二人は感想を語ってくれました。またセンターで医療クラス

に通っていたことも役に立ったそうです。

冬季アジア大会は大きな国際大会ですから、事前に研修があったり、分厚い資料が送られてきたりで、みんな初めは緊張していました。けれども実際にやってみれば、それほど難しいことではないと安心したようです。参加した帰国者は、「またやりたい、また来年も(?)やりたい」とボランティア活動に対する意欲がさらに湧き、自信もつけることができました。

カレンダー市で今年も活躍



年初めに開かれた、札幌ユネスコ協会によるカレンダーリサイクル市のためのカレンダー仕分け作業を、去年に引き続き中国・樺太帰国者14名が手伝いました。昨年参加した人は、もう慣れた様子でてきぱきと働いていました。作業の後、好きなカレンダーがもらえることも楽しみでした。

カレンダー市の収益金は、「東日本大震災子ども支援」等の活動に充てられます。作業をしながら、様々な人と関わりとともに、社会貢献もできた時間でした。

旭川・おしゃべり交流会

おな せいかつ なか よ
同じように生活して仲良くなるかつどう ねんかん ふ かえ
活動の5年間を振り返っておしゃべり

旭川市でのボランティアの皆さんとの「おしゃべり交流会」は5年になります。帰国者の地域での生活の安心を、そしてお互いに学び、理解を深め豊かな人生を、と交流を進めてきました。

3月9日、これまでの活動を振り返り、次のステップを考えてみようとおしゃべりました。

これまでの研修会や帰国者の話を聞く会で「戦争について、封印されていない生の声を聞き、強い印象を受けた。ものすごくよかった」、「別の面からの見方ができるようになった。気づかせてくれてよかった」という感想や、交流を通じて「帰国者やボランティアの方の話をもっと聞きたい。いろいろな人の話を聞くことは大事。人というのはインプットをやめたらだめ」、「地域になじめないマイノリティである帰国者をつぶすのではなく、同じように生活し、お互いに仲良くなるのが大事」、「みんなで輪になっておしゃべりをしたり、食べることが一番大事だと思う」などの意見のほか、「帰国者の隣近所付き合いはどんな風なのだろう。もし、あまり付き合いがないようなら、ボランティアとの連絡網をつくってはどうか」と身近な交流、サポートについての提案もありました。

中国帰国者の林さんは、「皆さんから教えてもらって、もっともっと勉強します」と語り、そんな林さんに対して、尊敬できる立派な方という声も出ていました。交流を通して得られたものは多く、皆さん

の心を支える力になっています。

今回は、はじめてのボランティア3名も参加、満州引揚を体験した人、また職業訓練校で帰国者を教えた、という人もいて、今後の交流もさらに広がります。

来年は春を迎えて、かたくりの花を見に行こうという計画も。意欲あふれるおしゃべり会議になりました。

料理交流会

かざ の り まき ちょうせん
飾り海苔巻に挑戦

「孫につくってあげたい」

日本の料理を学びながら交流する料理交流会が、1月23日、ボランティアの皆さんを含む32名が参加して開かれました。前回7月のおはぎに続いて、今回は飾り海苔巻をつくりました。



海苔巻は中国にもロシアにもない料理だけに、挑戦するのは初めて、という人もいて、興味深げに取り組んでいました。

飾り海苔巻は、ふりかけや桜でんぶで色を付けた細巻きを花びらに、たくあん漬けや蟹かまぼこなどを花の芯に見立てて、全部いっしょに白いご飯で巻いてつくります。切るとお花のかたちになるとわかり、みんな二本目は一本目よりきれいにつくることができました。

帰国者もボランティアの皆さんも、自分の海苔巻づくりに一生懸命で、会話が途切れる場面もありましたが、「難しかったけれど楽しかった」、「孫が海苔巻が大好きなので、つくってあげたい」と満足そうでした。

エヌピーオー
NPOシーズネット・介護サロン&お茶サロンまいかい た さい こうりゅう あたら ひと
毎回多彩な交流、新しい人も

高齢化問題と取り組むエヌピーオーシーズネットへの委託事業「介護予防サロン」が、厚別区もみじ台団地と手稲区前田団地で活発に続いています。

二つの会場は、いつも明るく笑顔にあふれ、いきいきとみんなの活力が引き出されます。帰国者の皆さんは、心から楽しみのびのび。

ラダー運動は「身体を動かし、頭も使えて、面白い」と挑戦します。まっすぐ歩くことさえおぼつかなかった0さんも、いまではしっかりと柵の中を歩けます。指導する竹田先生も、驚き感心しています。老化を防ぎ、脳の活性化をめざす運動に、会場に歓声が広がりました。

3月からは、看護師が来て血圧測定の健康チェックや、食べたり飲んだりするときむせないようにという講話もあって、役に立つ知識も学びました。

ひろ りかい ちいき あんしんささ
広がる理解で地域の安心支える

運動が終わったあとの「お茶サロン」もおしゃべりがはずみます。担当の青木さんは、いつも新たな参加者に呼びかけ、地域の皆さんとの交流を通じて、帰国者理解が広がります。帰国者の皆さんも、多彩で飽きさせない企画や体験を通して、理解を深めています。

厚別会場も手稲会場も、帰国者の皆さんに「もっと回数をふやして」と大好評で、地域の生活に安心心が広がります。

5月・6月・7月の行事

5月12日	健康運動教室
5月14日	DVD上映会
6月16日	健康運動教室
6月下旬～7月上旬	さくらんぼ狩り
7月9日	DVD上映会
7月14日	健康運動教室

しんがく
進学ニュースからふと き こくしゃ めい だいがくごうかく
樺太帰国者2名が大学合格

今年の春も、また明るいニュースが届きました。樺太帰国者三世のKくんが東海大学の国際文化学科に、同じく三世のHくんが、ロシア極東連邦総合大学函館校に合格しました。Hくんは、母語であるロシア語を基礎からきちんと勉強したいと考えて、ロシアの大学を選びました。また、Kくんも第二外国語としてロシア語を選択しました。

将来に向けて、自分自身が持つ可能性を、彼らはさらに広げようとしています。心から応援したいと思います。

とうこうだい ぼしゅう
投稿大募集!

帰国者の皆さんの作文、詩、エッセイ、物語のほか写真等の作品をお待ちしています。日本語・中国語・ロシア語の作品を受け付けます。「しらかば」に載せてほしい作品を郵送、または直接センターにご持参下さい。

※紙面の都合上、掲載できない場合もありますのでご了承ください。

投稿大征集!

中心季刊「しらかば」向各位帰国者征集作文、詩歌、散文、小説、照片等投稿作品。日语、汉语、俄语不限。请把应征作品邮寄或直接提交中心。

※由于版面有限，或许有不适登载的作品，请谅解。

Ждем ваших произведений!

Присылайте нам свои сочинения, стихотворения, прозы, фотографии и т.д. по почте или по факсу, или занесите лично в центр. Мы принимаем рукописи на японском, китайском и русском языках. Они будут напечатаны в нашем вестнике «Сиракаба».

※Не все произведения, присланные вами могут быть напечатаны из-за недостатка места. Просим вашего понимания.

しらかば

2017年 夏号 第37号

北海道中国帰国者支援・交流センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目かでの2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412 URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp/> E-mail: hokkaidocenter@dosityakyo.or.jp

医療・介護特別クラス

変わる帰国者の介護意識



2000年に介護保険制度が始まり、十数年が過ぎました。帰国者の間でも、日本での生活が長くなり、高齢化が進むにつれて介護に対する意識が変わりつつあります。

元来中国もロシアも「老人ホーム」には良いイメージがなく、「子が親の面倒を見るのは当たり前」という考えが一般的なのですが、自分自身や家族の介護の問題がより現実的になっていく中、帰国者の介護保険制度に対する関心は明らかに高くなっています。

もし介護保険制度について何も知らないまま介護の問題に直面すれば、帰国者でなくともどうしたらいいかわからず、途方にくれてしまうでしょう。しかし帰国者の場合は、言葉や文化、習慣の違いが壁となり、より大きな問題に発展してしまう可能性があります。

そのような事態を避けるため、当センターではこれまで医療クラスの中で介護の話題を取り上げてきましたが、今年度からより介護に重点を置いた「医療・介護」クラスを開講しました。クラスの中で、前期計3回のゲスト講師を招いた特別講座も計画しました。一世を中心に定員を超える受講申し込みがあり、自分や配偶者の将来のために、「きちんと知っておきたい」と皆考えているようです。

第一回目の講座は、帰国者が一番関心をもっている「介護保険制度を使って何ができるのか」についてお話を聞きました。

いろいろ知りたい介護のこと

必要な情報を自分自身で



「医療・介護」(中国・ロシア)クラスで、介護の専門職による特別講座「介護保険で何ができるの?」(6月5日)、「介護保険制度について」(7月3日)が開催されました。

札幌市中央区第1地域包括支援センターの梅津ゆたか介護支援専門員から、介護保険で利用できるさまざまなサービスや、手続きについて具体的なお話を聞きました。これまでも専門家を招いて介護保険制度や介護のコツ、車いすの使い方などを学んできましたが、4月から始まった新しい「医療・介護」クラスは、必要な情報を「自分の力で得ること」が大きな目標です。

授業では、当日使用する資料や中国残留孤児援護基金作成の介護情報資料(中国語とロシア語訳付)を使って事前に大まかな内容を理解し、質問したいことを日本語で練習しました。また苦手なカタカナ語や漢字語彙、専門用語も取り上げました。たとえば、ほとんどの人が「ヘルパー」とか「ケアマネ」という言葉は聞いたことがあっても、「訪問介護」や「介護支援専門員」は知らなかった。

たと言います。言葉の意味をきちんと把握しておくことの大切さを、事前学習で感じることができました。



資料は受講生が理解しやすいように、振り仮名付きの大きな字で作成してもらい、当日は梅津支援専門員にゆっくり話してもらいました。「指体操」や介護予防のためのゲームも取り入れた貴重な2時間でした。

受講生の日本語力にはありますが、熱心にメモを取ったり周りの人と互いに教え合ったりしていました。出席した樺太帰国者のひとり「事前にロシア語訳の介護資料を見て、難しい漢字や専門のことばも授業で勉強していたので日本語だけでもよくわかった。医療や介護のことをいろいろ知りたい」と話していました。

特別講座は、引き続き 8月に薬剤師による「薬について」を予定しています。

新しい介護支援事業がスタート

中国語・ロシア語による語りかけ支援

中国・樺太帰国者が、安心して介護サービスを利用するための支援が始まります。

帰国者が介護サービスを利用する機会も増えていますが、言葉の問題で周りの人とのコミュニケーションがうまくとれない、生活習慣の違いから提供されるサービスが合わない、といった問題も起こっているのではないのでしょうか。

このたび全国の中国帰国者支援・交流センターで、帰国者が不安や孤独を感じることなく、安心して介護サービスを受けられるように、中国語・ロシア語で話し相手になる「語りかけボランティア」訪問事業を開始することに

なりました。

現在は準備中で、これからボランティアや訪問希望者を募集する予定です。詳細については、またお知らせいたします。

旭川・おしゃべり交流会

突哨山・日本一のカタクリの花

気持ち晴れた！と笑顔



旭川市と比布町の境界に広がる突哨山は、北国の春の花カタクリの日本一の群生地です。4月27日、春を見に行こうとカタクリ参観のおしゃべり交流会が開かれました。



この日は、稲刈り体験でお世話になった突哨山のふもとに住む黒川さん、突哨山の自然を守るエヌピーオー NPOモリネットの山本代表、突哨山でフィールド活動に携わる清水さん

ら3人の専門家が案内、説明をしました。山中に一面に広がるカタクリの花々、みずみずしい生命力に溢れる自然にふれて、日頃引き籠もりがちな帰国者の皆さん、「気持ちが晴れた」、「暗い気持ちも吹き飛んだ」と明るい笑顔で語っていました。

お弁当を持ち寄り、ボランティアの皆さんとおしゃべり、自然との共生を学び、多文化共生を学び合う交流会になりました。

からふと き こくしゃ とくべつ
樺太帰国者のための特別クラス

かんじ ひろ にほんご せかい
漢字で広がる日本語の世界

4月^{がつ}から 3カ月^{さんがつかん}間の期間^{きかんげんてい}限定^{からんと}で、樺太^{きこくしゃ}帰国^{からんと}者のための
「初級^{しよきゅうかんじ}漢字^{かんじ}」クラス^{かんじこう}が開講^{めい}しました。13名^{めい}の樺太^{からんと}帰国^{きこくしゃ}者が
このクラス^{かふ}に通います。

このクラスでは、ひとつひとつの漢字の書き方、読み、意味、使い方を丁寧に学んでいきます。ある日のクラスでは、火、水、金などの漢字を練習しました。覚える時はみんなで「1、2、3」と声に出しながら、指で空中に漢字を書きます。基本的な漢字の書き順を覚えていれば、より難しい漢字でも大丈夫。歌のように体操のように何回か繰り返して、体と表現を学び、発音練習へと授業は続けました。



ある受講生は、「たとえばロシア語のアルファベットは、文字そのものは意味をもっていない。ひとつの漢字にいくつもの意味や読み方があることが大変だけれど、見ただけで意味がわかるようになると、とても面白い」と言います。樺太帰国者が苦手意識をもちやすい漢字ですが、面白さを感じることができたようです。

また繰^く返し^{かえ}復習^{ふくしゅう}しながら学^{まな}ぶこと^{こう}も効^{こう}果^{くわ}があり、日^に本^{ほん}語^ごを
勉^{べん}強^{きやう}し始^{はじ}めた時^{とき}は、漢^{かん}字^じはとて^いもむずか^あしいと思^{おも}った。今^{いま}の授^{じゆ}業^{ぎやう}
は復^ふ習^くにもな^なって^いて、繰^く返^{かえ}すこと^{こと}で以^い前^{ぜん}より漢^{かん}字^じの勉^{べん}強^{きやう}が楽^{らく}
にな^なったと語^{かた}る人^{ひと}もい^いました。

今回の漢字クラスは受講生にとっても好評で、3カ月で終わらずにもっと続けてほしいとの声も出るほどです。
漢字を知ることによって日本語の世界が少しずつ広がっていくのを、受講生の皆さんも実感しています。

～帰国者による作品展（習字）～



ひだりうえ お の ひろかず やす だ こ とみ な とみ こ な ら い く こ たけ な か さ と み よ こ た こ あ か ほ り え い こ たけ な か さ と る す ざ わ り つ ま さ
(左上から) 尾野弘和 康田ユリ子 富永富子 奈良幾子 竹中里美 横田レイ子 赤堀英子 竹中悟 菅原満征

よ ねん えいじゅう き こく からふとざんりゅうほうじん
四年ぶりの永住帰国・樺太残留邦人

はやさかたかし
ようこそ 早坂 隆 さん、オクチャさん

ひと やく た
ここで、人の役に立ちたい



がっ にち ねん えいじゅう き こく はやさかたかし
6月15日、4年ぶりの永住帰国となった早坂隆さんと
妻のオクチャさんが、旭川市に定着しました。

はやさかたかし ねんからふと う ははあや さいとうとも
早坂隆さんは、1946年樺太の生まれ。母親の斎藤友
子さんは、隆さんの 弟の 一郎さんとともに一足早く
1999 年に永住帰国。2007年に亡くなりました。

のこ じんせい き ざい はやさか
サハリンに残り人生を築いてきた早坂さんにとって、帰
国を決意することは容易ではありませんでした。決心の
背景には、旭川に住む母親の妹である叔母と 弟の 存
在、また隆さんに寄り添い、その健康を気遣う妻オクチ
ャさんの思いがありました。

ねん 4年ぶりのサハリンからの永住帰国ということで、早坂
さんのことは話題になり、新聞やテレビでもとりあげられ
ました。

14日に札幌に到着した早坂さんは、翌日当センターを
訪問。所長が「安心できる生活に向けて、全力でサポー
トしていきます」とあいさつしました。その後道庁訪問、さ
らに旭川市長表敬訪問と続き、行く先々でのマスコミ
の取材に時折疲れが見えたものの、終始帰国と受け入
れに対する感謝の言葉を口にしていました。旭川では、
叔母さんに迎えられて、本当に安心したようです。

おしゃべり交流会 みんなで支え合おう



がっ にち とう しゅせい こうりゅうかい
6月26日には、当センター主催のおしゃべり交流会の
中で早坂さんの歓迎会が開催され、帰国者やボランティア
が笑顔で歓迎しました。早坂さんは「歳をとってはいるけ
れど、ここで何か人の役に立つことをしたい」とあいさつ
しました。日本語での交流はまだできませんが、同じサハリ
ンからの帰国者と色々話をし、温かい言葉もかけら
れていました。

かんげいかい あさひかわ ししきいん み もとひきうげにん にほん
歓迎会には旭川市職員、身元引受人のほか、日本サ
ハリン協会の斎藤会長、旭川市中央地域包括支援セ
ンターのセンター長も参加し、定着したばかりの早坂さん
夫妻を皆で支えていこうと支援の気持ちを集める会に
なりました。

これから日本の生活に慣れるまでには、まだ時間がか
かりますが、温かく見守っていきたいと思います。

8月・9月・10月の行事

8月7日	「医療・介護」特別授業
8月9日～8月20日	日本語授業夏休み
8月20日	介護予防サロン(もみじ台)
8月21日	旭川・おしゃべり交流会
8月23日	介護予防サロン(手稲)
9月3日	DVD上映会
9月8日	健康運動教室
10月20日	健康運動教室
10月	秋の研修旅行

編集後記：帰国者と接していると、当たり前と思っている物事の別
な側面が見えてくることがあります。帰国者支援において、大切な
視点であると感じさせられる日々です。(S)

しらかば

2017 年秋号 第38号

北海道中国帰国者支援・交流センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目かでの 2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412 URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp> E-mail: hokkaidocenter@dosyakyo.or.jp

介護支援事業 **語りかけボランティア養成研修会**

「傾聴」とおして安心感を



10月から始まる当センターの新規事業「語りかけボランティア訪問」のボランティア希望者のための研修会が、9月22日に開催されました。研修会には10名のボランティア登録希望者が参加、そのうちの4名が中国・樺太帰国者1.2世でした。

研修会^{けんしゅうかい}は、所長^{しやうちやう}のあいさつ^{あいさつ}に始まり^{はじ}、帰国者^{きこくしやにん}事情^{じきやう}
やセンター^{かつかうじやうきやう}の活動^{かつどう}状^{じやうきやう}況^{きやう}などの説明^{せつめい}事項^{じこう}の後^{のち}、札幌市^{さつぽろし}
中央区^{ちやうやうく}第一^{だいいち}包括^{ほうかく}支援^{しえん}センター^{せんたー}の梅津^{うめづ}ゆたか^{ゆたか}主任^{しゆじん}介護^{かいご}
支援^{しえん}専門員^{せんてんいん}による「介護^{かいご}保険^{ほけん}のお話^{はなし}」と、北海道^{ほくかいどう}総合^{そうごう}
福祉^{ふくし}研究^{けんきう}センター^{せんたー}の池田^{いけだ}ひろみ^{ひろみ}事務局^{じむきやう}長^{ちやう}による「話^{かた}

りかけボランティアで大切なこと」の二つの講義が続きました。

「介護保険制度のお話」では、基本的な制度の仕組みを、「語りかけボランティアで大切なこと」では、ボランティアとして活動する上で大切な「傾聴」について学ぶことができました。

傾聴とは、相手の話をそのまま受け入れることで、話し手とよりよい関係を築き、気持ちを楽にしてもらうことを目的としています。そのため、「この人になら話してもいい」と思ってもらってから始まり、相手の話を取ってしまわない、否定しない、応援し続ける態度を示す

ろに出てしまいやすい咄嗟の一言など、^き気をつけるべき^{てん}点などを教わりました。

相手の問題を解決することが傾聴ボランティアの目的ではないので、たくさん
 さんの効果を自分自身に義務づけないことも大切です。けれども、話し手にとって
 人生のほんの一瞬に過ぎない関わりのおかげで、「話を聞いてもらえてよかった」
 と、もし思ってもらえれば、その一瞬の体験が安心感をもち、生涯相手を
 支え続けることができる。ボランティア活動の持つ可能性と尊さを、改めて認
 識した研修会でした。





料理交流会 中国の家庭料理をみんなで



9月27日 東区民センターで中国帰国者が中心になり、中国料理をみんなでつくる料理交流会が開かれました。樺太帰国者やボランティアさんも含む30名が参加しました。

今回は日本料理を学ぶのではなく、中国帰国者の皆さんが普段から親しんでいる料理をつくるということで、会場に着くが早いか料理を始めてしまう人もいほど、皆大はりきりでした。

肉まんといびまん、中華スープのメニューで材料を用意しましたが、グループごとに自由に料理してもらいました。肉まん、いびまんを別々につくる班もあれば、全部の具を混ぜて一種類の中華まんをつくる班もありました。2種類つくる場合でも、こうするとおいしい、と言っていびあんに少しひき肉を加える班もありました。また、蒸す以外にも油をひいたフライパンで焼いたり、生地のみで一品つくったり、味も見た目もそれぞれ少しずつ違う中国の家庭料理が出来上がりました。

参加した樺太帰国者やボランティアさんも、それぞれのグループリーダーの中国帰国者に教えてもらって一緒に作りました。サハリンにもピャンセと呼ばれる似た料理があり、皮の包み方や、先に具を炒めるなどいくつか違いはありますが、樺太帰国者にとって、今回のメニューは全く目新しいものではなかったようです。

帰国者が料理を教えるというのも初めての試みでしたが、うまい具合に皆で協力しながらつくる

かたちになりました。

最後につくった料理を皆で試食しましたが、特別な調味料を使っているわけではないのに、なぜか独特の風味があり、ボランティアさんにとっては、帰国者の持つ文化をまさしく実体験するひとときでした。家でもぜひつくってみたいと、皆さん語っていました。

次回の料理交流会は、樺太帰国者が中心となって、ロシア料理をつくる予定です。また新たな食文化体験の時となりそうです。





旭川・おしゃべり交流会・浄水場見学
社会支える安全な水づくりに驚き
美瑛「青い池」・気持ち明るくなる



8月21日、旭川のおしゃべり交流会は、帰国者の皆さんとボランティアの皆さんで浄水場を見学、毎日使う水道の水はどこから来るのか学びました。見学したのは、旭川市忠別川浄水場。浄水施設で説明を受け、清潔で安全、そしておいしい水が家庭まで届けられていることを知って「すごい！」という驚きの声が上がりました。安全に管理された水が、社会を支えていることについて理解を深めました。

この日は、続いてレク活動観光地で人気のある美瑛の「青い池」を訪れました。途中、美瑛町社会福祉協議会の一室を借りて昼食となり、お弁当を広げて気楽な雰囲気のおしゃべり交流が繰り広げられました。



大雪山の山麓「青い池」では、美しいエメラルド

ドグリーンの水の色に「きれい、きれい」と皆大喜び。帰国者もボランティアの皆さんも「気持ち明るくなる」と語り、帰国したばかりの樺太帰国者早坂隆さん夫婦も「皆さんに親切にしてもらい、感謝している」と語りました。他の帰国者も「みんなと一緒に、とても楽しい」「一人では生きられない。皆さんは私のために、私は人のために。感謝している」と、おしゃべり交流会の意義を語ってくれました。

サハリナー一時帰国団
日本語模擬授業を体験

センター訪問で知る帰国者の生活

9月29日に樺太残留邦人の一時帰国団が当センターを訪問、日本語の模擬授業を体験しました。今回の一時帰国は、9月27日から10月7日まで、11日間の日程で北海道を訪れるという内容で、NPO法人日本サハリン協会によって企画されました。一時帰国に参加するのははじめて、という人もいれば、もう15回目という人も。「ここは自分の国だから、何回来てもいい」と言います。帰国団は、離れていた家族や親戚と再会したり、道内各地の祖先のゆかりの地を訪ねたりします。



模擬授業では、自己紹介や「好き、いや」「わかります、わかりません」などの簡単な表現を皆で練習しました。日本語のレベルは皆まちまちです。子供のころから話していた人もいれば、ほとんど知らない人もいましたが、絵や小道具を使いながら、状況や気持ちに合わせて声を出していく授業を、皆楽しんでいました。

授業の後は、当センター所長や職員も一緒にお昼を食べながら交流しました。センターで開催している「樺太帰国者交流パーティー」の様子をスライド上映で見てもらい、永住帰国した仲間の日本での生活を垣間見るひとときとなりました。



白樺 白樺樹 Берёза

しらかば

2017 年冬号 第39号

北海道中国帰国者支援・交流センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目かでる 2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412 URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp> E-mail: hokkaidocenter@dosityakyo.or.jpからみと き こくしゃこうりゆう
樺太帰国者交流パーティーふん い き なか おも で きょうゆう
ロシアの雰囲気の中で、思い出を共有

12月23日、東区民センター大ホールにて、帰国者・支援者の皆さんが参加して、来る新年を祝う「樺太帰国者交流パーティー」が開かれました。年末に時期を移して5回目となるこの交流パーティーは、台本、プログラム、そして料理も帰国者によって準備され、ロシア独特の雰囲気（雰囲気）が味わえる「お祭り」です。

今年はひときわ華やかに、ロマの人々の野営地での祭りをテーマに、ロマの女性に扮した参加者たちが、三頭立てのトロイカに乗ったジェド・マロース（サンタクロース）や熊、千支の犬とともに賑やかに登場、歌やダンス、占いでパーティーを盛り上げました。



お正月はロシアで最も盛大な祝日で、お祝いはおみそが 大晦日の夜から始まります。もみの木を飾り、日本で言うサンタクロースにあ

たるジェド・マロースがやってきて、子供たちにプレゼントを配ったりするので、日本人にとってはクリスマスのように



見えますが、クリスマスは年が明けた7日に祝われます。そのため、ロシアでは年末から1月上旬までずっとお祝いムード。お祝いの食卓に欠かせないのは、ペリメニと呼ばれるロシアの水餃子、ハラジェッツと呼ばれる煮こごり、日本のポテトサラダに似たオリヴィエサラダなど。今回1000個ほどのペリメニを帰国者有志数名が準備、他の参加者の持ちよりの手料理とともに、ゆでたてがテーブルに並べられました。



この交流会は、帰国者同士の貴重な交流の場でもあります。今回は一時帰国や所沢の定着促進センター入所中の写真を集めたスライドショーが上映され（写真の一部は日本サハリン協会が提供）、懐かしい思い出を皆で共有しました。また日本人の支援者にとっては、帰国者の持つロシア文化を体験する時です。楽しむ時は思い切り楽しむという姿勢に刺激され、はじめは戸惑いながらも踊りの輪に入って、楽しんでいました。



医療・介護特別講座

歯の健康を守るために

12月4日に開かれた医療・介護特別講座の第5回目は「歯と食事と健康」と題して、日の出歯科診療所の

医長孔令群先生にお話を

していただきました。講座の前半は、歯とその病気、歯の健康を守る方法についてのお話、後半は、実際に歯ブラシを使って正しい歯磨きの仕方を学び、先生が個別に指導をしたり、質問に答えてくれました。

食事の後、毎回きちんと磨けない場合はどうしたらいいか、食べた直後に歯を磨くのはよくないというのは本当か、といった質問に対して、寝ているときに一番菌が繁殖するため、夜寝るまえだけでもきちんと磨くように、また歯を傷つける可能性があるのは酢などを大量に摂った場合で、普通の食事ならば問題ない、と先生は答えていました。

「歯の健康」という、誰もが興味のあるテーマについて、疑問を解決し、新しい情報を得ることのできた講座でした。

椎内・地域生活支援推進事業

集まって一緒に活動「私たちサハリン村」



椎内には9家族の樺太帰国者が住んでいます。今年度からセンターがNPO日本サハリン協会椎内支

部に委託して、地域生活支援推進事業として、社会見学会や交流会を行ってきました。帰国者の皆さんは、集まって活動できる場所ができたことと大喜びです。

11月22日、料理講習会が開かれました。講師は今年で3回目の荒岡真喜子先生。帰国者ともすっかり親しく

なり、なごやかに進みます。今回は日本の家庭でもおなじみの巻き寿司、いなり寿司、ちらし寿司を作りました。巻き方が難しい巻き寿司も、楽しく学ぶことができました。そして、試食。おいしいと、賑やかに感想を言い合いながらいただきました。

帰国者の皆さんは、「私たちサハリン村」と、帰国者同士日頃から仲良く行き来して、助け合っているといます。担当する協会の古川さんは、さらに交流の輪を広げたいとがんばっています。

地域に広がる交流

NPOシーズネットが取り組む「介護予防サロン」



札幌のもみじ台団地、手稲前田公園団地で取り組まれてきたNPOシーズネットによる毎月1回の「介護予防サロン」。担当するシーズネットの青木基成さんは、地域で帰国者の皆さんが安心して暮らせるように、地域の住民の皆さんとの交流に力を入れています。もみじ台でも、サロンの常連になった住民の皆さんが、帰国者の皆さんとすっかり親しくなり、笑顔で言葉を交わすようになりました。

手稲前田公園団地でも、自治会の皆さんが参加しています。日頃から顔見知りである帰国者の皆さんと、もっと仲良くなりたいと、いっしょに運動し、終わった後のお茶サロンでは、中国茶とお菓子でおしゃべりを楽しんでいます。言葉でのコミュニケーションが難しいところもありますが、住民の皆さんの理解しようというやさしい気持ちが感じられます。

青木さんは、毎回の「介護予防サロン」に工夫を凝らし、住民との交流、帰国者への理解を地域に広げようと努力しています。



白 帰 り 研 修 旅 行 初 め て の 陶 芸 体 験



今年の秋の白帰り研修旅行は、恒例の温泉に加えて、江別市にある「アトリエ陶」で陶芸体験をしました。アトリエの定員の関係で2回(10月23日、10月30日)に分けて行われ、計45名が参加しました。一人に1 kgの粘土が割り当てられ、手動のろくろを使って、それぞれ好きな器や鉢などを作りました。

アトリエに入ると、まずはじめに先生にお手本を見せてもらいました。粘土をよく練って、ひと固まりにまとめ、それからろくろを回しながら、親指を粘土の中央に押し当てると、その部分がへこんで器の形になっていきます。先生が指の位置を少し変えるだけで、自由自在に形を作る様子に、参加者の歓声があがりました。

先生がやるのを見ると、いかにも簡単そうに見えるのですが、実際にやってみるとなかなか難しく、思うような形になりません。時々先生に助けてもらいながら、皆さん、自分の欲しいと思う器を作り上げていました。そんな中、中国帰国者のYさんとKさんの二人は楽々と作業を進め、花や鳥などで思いのままに自分の器を飾り付けていました。

初めての陶芸体験でしたが、皆にとって面白い体験となりました。後日焼きあがったものが送られてきましたが、中には自分の作った作品がとても気に入って、毎日のように使っている人もいます。

陶芸体験の後は、温泉「岩見沢ゆら」でゆっくりとした時間を過ごし、交流を深めることができました。

～ 帰 国 者 に よ る 陶 芸 作 品 ～



白樺 白樺樹 Берёза

椎内・クリスマス交流パーティー 皆で助け合いながら開催



札幌で交流パーティーが開かれた次の日の12月24日、椎内でも樺太帰国者によるクリスマス交流パーティー

が開かれました。椎内では、センターと日本サハリン協会が協力して進めている「孤立しない拠点作り」の取り組みとして、2015年から椎内市に住む帰国者たちが、自分たち独自の交流会を開き、今回が3回目。28名の参加者の中には、市内の帰国者や支援者のほか、前の日に札幌のパーティーに参加していた二世や旭川市に住む帰国者も合流して、いつも以上に賑やかで楽しいパーティーとなりました。

豪華なシャンデリアのある椎内市日口友好会館は、クリスマスにぴったりの華やかなロシア風の会場。サンタクロースから参加者みんなにプレゼントが配られたあとは、手作りのお料理やおいしいお酒を楽しみながら、ゲームや歌、ダンスで交流しました。また今回は新しいプログラムとして、ロシアのお話として有名な「大きなカブ」も上演されました。劇には帰国者に混じって日本サハリン協会の斎藤会長も娘役で出演。ゲームでは大人たちが子供のころの気持ちに戻って楽しみました。

椎内では今年から、このパーティーのほかにも郷土を知る勉強会や料理・栄養教室、体力増進プログラムなどを帰国者自身が企画して行っています。こうした活動をとともに協力し合うことで、帰国者同士の交流がさらに深まり、日常生活でも助け合うようになっています。

(寄稿 日本サハリン協会)

2月・3月・4月の行事

2月9日	健康運動教室
2月11日	中国帰国者新年交流会
3月2日	健康運動教室
3月5日	医療・介護特別講座
3月11日	中国・樺太帰国者を知る集い・学習発表会
3月19日～4月8日	日本語教室春休み

旭川・おしゃべり交流会 一緒に作り、一緒に楽しむ



12月は「一足早いクリスマス交流会」と名付けて、ボランティアの皆さんを中心に料理交流会を開催しました。中国・樺太帰国者の皆さんが、エプロン姿で一緒に料理を作り、フライドチキンやいなり寿司、サラダにケーキなど、たくさんの料理ができてあがって、楽しく交流会は進みました。最後に中国帰国者の林さんがあいさつし、「こういう場所があってうれしい。皆さんの帰国者のために、という気持ちはたいへんありがたく、感謝します」と語りました。

旭川・ボランティア研修会

富山欣也さん、伝えたい思いを語る



10月26日、樺太帰国者問題への理解をテーマに「ボランティア研修会」を開催しました。この日は、樺太引揚と帰国運動の歴史を学んだあと、樺太帰国者 富山欣也さんが、その人生を語りました。

伝えたい、話しておきたい、という強い思いがあり、この日のために準備してきたそうです。子供時代、戦争跡の白骨や銃弾を見た記憶、父を亡くし、困窮する生活を助けて合って乗り越えたこと、製紙工場での30年間の勤務、ソ連時代の厳しい生活など、歴史とともに生きた残留日本人の生涯を語りました。

あいま ひるきゅうけい きこやみな いっしょ ちゅうづく た かいじょう づえ みんな ちよ
合間のお昼休憩では、帰国者皆と一緒に昼食を食べました。会場の机をくっつけて、皆が持ち寄ったごちそうが並
べられました。どれもおいしくて、とても楽しい時間となりました。交流も含め、今回の発表会は大成功と言えるでしょう。
(※原文の内容を要約。ロシア語原文は2面に掲載)



11 марта 2018 года в нашей школе состоялся концерт по случаю окончания учебного года. Такой концерт проходит ежегодно. И каждый класс готовит свои номера для выступления. Все номера заслуживают аплодисментов потому, что в них чувствовалась душа выступающих. Особо хочу выделить интервью наших соотечественников первого и второго поколения из России и Китая. Очень интересно соотечественница из Китая Ямамото сан рассказала историю своей семьи. Наша соотечественница из России Хонда сан поведала нам о своих детских воспоминаниях, связанных с приходом советской армии на Сахалин. Очень трогательно и даже с юмором. На что зрители отвечали смехом и словами поддержки. Затем на сцену выходили со своими номерами класс за классом.

А тут и Масленица подоспела. Это участники класса Мидзутани сенсей в ярких платках и с «блинами» в руках. А на экране блины с икрой, с грибами, со сметанной, с мясом, да блины с пожеланиями. Взял блин, открыл, а внутри секрет, пожелание от мастерицы: «Чтобы сердце любило, чтобы солнце светило». Весело, задорно девчата отыграли свой номер.

Праздничная программа состояла из двух отделений. А между отделениями состоялся обед. Прямо в зрительном зале составили столы и устроили пир, на который каждый выложил свои яства (кушанье), принесённые из дома. Обед прошёл весело и все было очень вкусно. Так что можно смело сказать, что праздник по случаю окончания учебного года в нашей школе по изучению японского языка, удался на славу.

Исибаси Эмири

旭川・おしゃべり交流会

帰国者の現状知って、交流を考える



2月22日に開催されたおしゃべり交流会は、帰国者の現状を知り、旭川に居住する中国・樺太帰国者が老後地域との関わりを保ち、安心して生活を送るために何が必要か、いっしょに考える会になりました。

はじめに、厚労省の平成27年度中国残留邦人等実態調査報告書から現状を学びました。続いてセンター制作の帰国者の証言映像を見て、その声に耳を傾けました。

ボランティアの皆さんからは「想像以上の苦労があったと感じた」との感想のほか、「帰国者との交流は必要」という意見もあり、「参加できない帰国者への支援をど

のようにするか」について話し合いました。

来年度の活動計画も含めて話し合いは進み、おしゃべり交流会は、学びやレクリエーション、社会見学とともに交流を深める活動を考え続けていきます。

医療・介護クラス

必要な知識を、少しずつ

昨年度から開講した医療・介護クラスでは、介護保険制度や認知症、介護用品、薬、歯の健康、栄養と食べ物などをテーマに、専門職を講師に招いて計6回の特別講座が開かれました。受講生は資料のたまかな内容や専門用語を事前に授業で学び、講座に臨みました。

健康や介護への関心は高くても、具体的に知りたいことはそれぞれ違います。日本人ならば、自分で必要な情報を新聞やテレビなどから簡単に得ることができますが、帰国者の場合はそうはいきません。たとえ全部はわからなくても、自分が欲しい情報を拾っていくようになること、それが医療・介護クラスの目的です。受講生の皆さんは、少しずつ知識を広げています。

次回の特別講座は、「元気なシニアの栄養と食べ方」を5月21日に予定しています。



しゅんせつ ちゅうごく き こくしゃしんねんこうりゅうかい
春節・中国帰国者新年交流会

みんなに会^あうのが楽^{たの}しい！ ボランティアの皆^{みな}さんの支^{ささ}える力^{ちから}で



春節を迎え、今年も中国帰国者新年交流会が、2月11日、東区民センターで開催されました。参加したのは、中国帰国者、ボランティアの皆さんおよそ130名。会場は、華やかな中国の彩りに彩られ、民族舞踊や歌が賑やかに繰り広げられました。

テーブルでは、参加者がそれぞれ思い思いに語り合い、どこもかしこも笑顔です。「楽しい」、「心地よい、安らぐ」、「こういう場所が必要。続けてほしい」と帰国者は口をそろえて言います。家族連れの参加者は孫を紹介したり、2世は日々の仕事を自信に満ちて語ったり、会場は大きな家族の交流のよう、親しさと温かさに包まれていました。

新年会では、今年もボランティアの皆さんが帰国者のみなさんと協力して、会場づくりから料理作り、配膳や後片付けまで熱心に取り組みました。ボランティアのみなさんの力に支えられて、喜びあわれる会になりました。

白樺 白樺樹 Берёза

りょうり こうりゅうかい
料理交流会

「ロシアの餃子」にみんなで挑戦



3月20日東区民センターで、第2回料理交流会が開催されました。31名の中国・樺太帰国者と7名のボランティアが参加し、ロシアの家庭料理に皆で一緒に挑戦しました。

調理は、2世の樺太帰国者が講師となり、進められました。メニューはフレニキとパプリカ入りのキャベツサラダ。フレニキというのは、小麦粉で作った生地を具を詰めてゆでた、餃子に似た料理です。具は肉ではなく、炒めたキャベツやジャガイモのピューレ、カッターチーズなどを入れます。今回は、炒めた玉ねぎを混ぜたジャガイモのピューレを入れました。サラダは刻んだ野菜に砂糖、塩、りんご酢、サラダ油を加えて、混ぜ合わせるだけ。一般的にロシア料理というと味付けの濃いイメージがあるかもしれませんが、実際には、参加者の皆さんが驚くほど味付けはシンプル。主な味付けは塩で、胡椒すら加えないこともあります。

参加したボランティアの皆さんも、今回の料理は全く知らなかったそうです。ちょうどロシア正教会の復活祭が近づいた時期でもあり、一緒に料理しながら、春を迎えるお祭りがあり、断食があり、そして復活祭を迎える、というロシアの習慣を帰国者から教えてもらえた、と語るボランティアさんもありました。

中国帰国者にとっても、餃子の作り方とは細かい点で違って、新鮮な体験となりました。

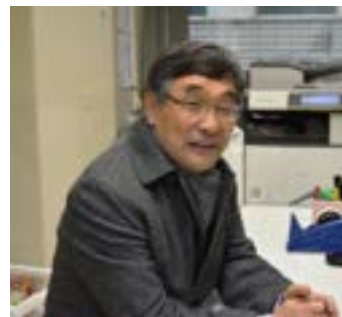
編集後記

今回の「知る集い・学習発表会」では、今までにもまして帰国者が生き生きと発表していたことが、とても印象的でした。帰国者は、伝えたい何かを胸に秘めている、それに耳を傾けなければ、と改めて思われたひとときでした。(S)

しよくいん たいにん しんにん
職員の退任・新任

4月から新体制になりました！

4月から当センターも新しい体制になり、青山智恵主査がセンター職員として就任しました。これまで主に土曜日に出勤していた菅生善一非常勤相談員は退職し、これからは樺太帰国者1世の一人として、センターの活動に参加することとなります。代わって、安田真江相談員が非常勤として勤務します。向後洋一郎非常勤相談員は、今年度も引き続き勤務します。



菅生善一非常勤相談員

長い間大変お世話になりました。僕は妻と一緒に、2000年2月10日に永住帰国を果たしました。僕の一番大切な夢は、生きている間に一度両親

の国で暮らすことでした。母親が果たせなかった夢を、僕が果たすことができました。永住帰国をしてから一番楽しい幸せな時間は、皆様と一緒にセンターで働いたときです。皆さん、本当にありがとうございました。

青山智恵主査

4月より事務担当として、お世話になります。日本語で話しかけてもらえると、うれいです。どうぞよろしくお願いします。



5月・6月の行事

5月11日	健康運動教室
5月13日	介護予防サロン(もみじ台)
5月16日	介護予防サロン(手稲前田)
6月3日	DVD上映会
6月15日	健康運動教室
6月17日	介護予防サロン(もみじ台)
6月20日	介護予防サロン(手稲前田)
6月下旬(予定)	研修旅行